

令和6年8月27日

南の風パリ五輪女子日本代表特集号V

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

特集号のまとめとして、生意気なようですが今後の日本女子バスケが目指す方向について私の考えを書いてみます。

今回のパリ五輪を振り返ってみると、東京五輪は銀メダルを獲得したわけですし、戦績は後退したと受け止められるのは仕方ないと思います。

しかし予選敗退という「結果」だけではなく、「パリ五輪までの道筋&今後の方向性」という視点で考えてみたいと思います。

パリ五輪の目標設定では、前回、銀メダルだったので、次に目指すのは金メダルしかありませんでした。恩塚ヘッドは、その難しいタスク（課題）に挑戦したわけです。

恩塚ヘッドが描いたスクリプト（台本）は、相手に圧力を掛け続けるディフェンス、トランジションを素早くしてチャンスを作る、そして原則（チームとしての決め事）の下に、一人ひとりが瞬時の状況判断で攻撃を展開するバスケットボールでした。40分間強度の高いバスケットボールを展開するために、選手は短時間で交代し、常にフレッシュな状態を維持する。この戦略でOQTを勝ち抜きチームとしての力は向上していました。

しかし、世界はさらにその先をいっていました。それがパリ五輪だったと思います。世界のレベルが急速に、加速度的に上がっていたのです。その背景には情報の均質化もあるでしょう。そしてレベルアップにひと役買ったのが、ほかならぬ東京五輪の日本だったと思います。

相手を圧迫し続けるプレスディフェンス、トランジションで走り切り、高確率で3Pシュートを決める。そのスタイルでフランスに2勝、ベルギーにも勝ち、決勝まで駒を進めました。その結果、対戦相手から警戒される立場になったのです。

8年前のリオ五輪までは、日本と対戦する相手国とすれば、「速くて3Pシュートはあって面倒だけれど、40分間トータルで戦えば、インサイドで制圧できるし、そこまでアジャストしなくてもいいだろう」という存在にすぎなかったと思います。つまり、そこまで対策する必要のない存在だったのです。

ところが、日本が東京五輪で銀メダルを獲りました。そうなるとう当然、対策を講じてきます。

今回対戦したアメリカ、ドイツ、ベルギーはそれぞれ異なるカラーのチームでしたが、共通して言えるのは、日本に3Pシュートを打たせないようにすることと、プレスディフェンスへの対応を丁寧にしてきたことです。日本が立て続けに3Pシュートを決めたときには、すかさずタイムアウトを取り、流れを分断してきました。各国の「日本対策」の戦術の立案と遂行が完璧に行われた印象です。

この3試合を受け、改めて突きつけられたのは、「サイズ」という日本のバスケットボールにとって**永遠の命題**です。今回はメンバー入りした、町田、本橋、宮崎、吉田、山本の5人の選手は170cm未満です。そのことから、恩塚ヘッドが速さを重視して選んだことがわかります。

試合中も3人のガードが同時にプレーする「スモール・ラインナップ」の時間帯がみられましたが、それにはリスクが伴いました。

最後のベルギー戦を見ますと、ペイントエリアにボールを入れられた場合、ガードがローテーション

でダブルチームって抑えようとしたのですが、相手センターのパス捌きが上手く外にパスアウトされ、そこから3P シュートを決められていました。ダブルチームにいてはいるのですが、ガードの身長が低いため、外にパスを出されてしまうのです。ペイントエリアも外も抑えられない。そして必然的にリバウンダーも小さくなる。それがベルギー戦の現実でした。

やはり、今後オリンピックの舞台で戦うためには、**サイズ（180cm以上）のあるオールラウンダーを育成していくことが必要になると思います。**

今回のパリ五輪の女子のレベルアップを目の当たりにすると、オリンピック出場は簡単なことではない感じがします。4年後のロス五輪に向け、しっかりとしたコンセプトを打ち出し、日本代表からミニバスのカテゴリーすべてが、オールジャパンで強化に当たる必要があると思います。

ただ、繰り返しますが今回に関して言えば、前回の銀メダルを受け、金メダルに果敢にチャレンジせざるを得なかったのです。

「金」しか目指せない状況は非常にタフでした。スタッフも選手も全力を尽くしての結果ですから、現実には現実としてしっかり受け止めなければなりません。そして次の4年につながるコンセプトを発見していく丹念な作業が必要になると思います。

パリ五輪に出場した選手、そしてサポート選手、2024代表候補の皆さん、そして恩塚ヘッドを始めスタッフの皆さん、本当にお疲れ様でした！！